

星一の生涯 ゼ努力と情熱の人々

東京の五反田駅近くに星薬科大学（東京都品川区荏原二丁目）があります。この大学を創立したのが、星一という人です。名字が大学の名前になつてるのは、日本では数少ないそうです。

彼は、明治六年（一八七三年）十二月二十五日、江栗村（現在のいわき市錦町）花ノ井に生まれました。父親は彼を佐吉と名付けました。江戸から明治へと世の中がが変わり、新橋・横浜間に鉄道が開通した翌年でした。文明開化の波が押し寄せ、日本が急速に西洋の文明を取り入れようとしていた時代でした。

父親は星喜三太、母親はトメと言いました。喜三太は子供を立派に育てるため、正直であることを大切にし、しつけと教育にはたいへんきびしく、悪いことをすると容赦なく叱りました。一方、母親は非常にやさしい人柄で、人を疑うことを知らず、誰に対しても親切で人のよい女性でした。

幼少のある日、佐吉は近所の子供たちといくさごっこをして遊んでいて、遊び仲間の放った手製の矢が彼の右目に突き刺さりました。喜三太は驚き、遠くの町の医者へ連れて行き、できうる限りの手当をしましたが、そのかいなく、ついには佐吉の右目は失明してしまいました。片目だけになると、距離感がつかめず、佐吉はさまざまなハンディを背負うことになります。しかし、彼は決してそ



星一の肖像写真



現在の星薬科大学

れを苦にすることなく、明るくたくましく成長します。後に、幼少時に左手に大やけどを負った野口英世と親交を結び、人々の健康や福祉に貢献する製薬会社を立ち上げた彼の人生の原点がここにあつたのかもしれません。

彼は、地元の小学校を卒業すると、平にあつた小学校の教師を養成する「授業生養成所」で学び、十二歳にして小学校の教師として就職しました。しかし、小学校で毎日働きながら、彼の心の中には東京へ出て学んでみたいという希望がしだいに大きくなつていきました。父親ははじめは佐吉が東京へ出ることに反対でしたが、佐吉の真剣さに心を動かされ、上京を許しました。

佐吉は明治二十一年の秋に上京し、働きながら勉強を続け、明治二十四年の春、十七歳で東京商業学校に入学しました。東京商業二年生の冬、佐吉は先生から紹介された「西國立志編」という本を読みます。福沢諭吉の「学問のすすめ」と並ぶ、明治期のベストセラーでした。この本は、もともとはイギリス人によって書かれました。江戸末期にイギリスに留学した中村正直まさなおおという人が翻訳ほんやくし刊行しました。この本では、貧しい家に生まれながらも、勤勉、忍耐、努力、工夫などによつて困難こんなんを克服し、成功をかちえた人たちの物語を紹介しています。そして、

個人の向上も国の発展も、もとはそこにあるのだと主張しています。佐吉は、「西國立志編」を読み終え、新しい世界が目の前に開けたように感じ、深い感銘かんめいを受けました。それ以来、「西國立志編」は佐吉の座右の書となります。いや、人生の指針、人生そのものとなるのです。



明治期に出版された  
「西國立志編」

佐吉は、何度も何度も「西国立志編」を読み返しながら、外国へ行つて勉強したいという強い思いを抱くようになります。東京商業二年を修了した明治二十六年の春、佐吉は帰省して父にこの思いを打ち明けました。アメリカでは、働きながら勉強することが可能であること、そして、なにかを身につけ、帰国して事業をやりたいこと。自分は必ずやり遂げる化身であること。これまで、佐吉の成長ぶりを観察していた父喜三太は反対しませんでした。そして、そして、このとき、佐吉は一人前に成長した証として、父の勧めを受け「一」と改名しました。

星一<sup>はじめ</sup>は、明治二十七年三月、東京商業学校を卒業し、その年の十月、サンフランシスコ行きの米国船に乗り、横浜を出港しました。彼が二十歳のときでした。

渡米して十二年間、星一<sup>はじめ</sup>はいくたびも彼の前に立ちはだかる困難を持ち前の勤勉、忍耐、努力、工夫で乗り越えていきます。また、常に正直であり、人を信頼する人のよきから、数々の協力者を得て難局を乗り切ります。

太平洋を越え、やっとサンフランシスコにたどりついた時には、不慣れと興奮による心のすきにつけこまれ、現地で知り合った日本人にだまされ、百ドルほどの所持金のすべてを巻き上げられました。彼は、すぐに職をさがし、ひどい仕事でもより好みせず働くと決意し、なんとか生き抜き、苦境を脱しました。

やがて東部に行き、コロンビア大学に入学しようと決意したときにも、学費をかせぎ出せず、講義を聞くのは半分だけにするから授業料を半分にまけてくれ、との案を持ち込んで交渉し、学校側を承知させました。卒業まで普通の二倍の年月を要してもいいとの覚悟で交渉し、なんとか壁を乗り越えたのです。苦学して、政治学、経済学、統計学、歴史を学び、彼はコロンビア大学を卒業します。



星一（左）と野口英世（右）

星一は、渡米中、経済的にたいへん苦しい生活の中でも、大岡育造、伊藤博文らの政治家、新渡戸稻造、野口英世ら、数多くの日本の著名人と知り合う機会を得て、その後、一生涯彼らとの親交を温めました。特に、野口英世とは、ともにアメリカで苦学しており、同郷であつたことから、たいへん親しくなり、たびたび野口の下宿を訪れ、互いの夢を語り合いました。後に、医学者として有名になつた野口英世が大正四年に帰国する際、帰国費用を準備したのは、星一でした。

明治三十八年、星一は十二年間の渡米生活を終え、帰国します。

彼は、三十三歳になつていきました。

帰国の翌年、彼は東京に小さな星製薬所をつくり、借り集めた四百円の資金で、イヒチオールという薬の製造に着手しました。彼がアメリカで学んだのは、薬の方面ではありませんでしたが、市販薬についての知識はいつのまにか頭の中にしみついていました。長い渡米生活の中で医者にからずに、安く病気を治すため、彼はドラッグストアで売られていた薬の名称や効能、定価を、いやでも覚えてしまっていたのです。イヒチオールは、打撲傷などの時に、湿布として用いる薬品で、アメリカで広く普及していたことから、日本でも作れば使う人が増えるに違ないと考え、製造に成功し、莫大な利益を得ました。その後も彼は持ち前のアイディアと努力、忍耐力、工夫で各種の市販薬をつぎつぎに作り、会社は飛躍的に発展しました。

明治四十四年、星製薬所は星製薬株式会社と社名を改め、工場内に働く人々のために診療所や幼稚園

をつくるなど、当時としてはたいへん進んだ施設をつくりました。また、商品の販売を特約店にまかせる現在のチエーン店方式を採用するなど、アメリカ流の方法で販売店を増やしていきました。さらに、南米のペルーや台湾に広大な土地を求め、薬の原料になる植物を栽培するなどして、「日本の製薬王」と呼ばれるようになりました。

こうして得た利益を、星一は第一次世界大戦の敗戦で困窮したドイツ化学会に対し、現在の金額で二十億円以上の資金を援助しました。明治維新後に多くの日本人がドイツから学んできたにもかかわらず、

日本は第一次大戦で戦勝国の一員として、戦わずしてドイツから多額の賠償を受けたことが、彼の良心には許せなかつたのかもしれません。また、大学に入りたくても、お金がなくて入れない故郷の若者たちのために、育英資金を提供しました。

その後、星製薬株式会社は、政治的な謀略に巻き込まれ、経営が立ち行かなるなど、苦難の道を歩むことになります。しかし、「病気で苦しむ人々に健康を与え、幸福と平和をもたらす人材を育てたい」という情熱は色あせることはありませんでした。星製薬株式会社の人材育成部門は、大正十一年に星製薬商業学校として独立し、戦後の学制改革で星薬科大学となりました。星一が、星製薬の会社経営のモットーとして掲げた「親切第一」という言葉は、現在も星薬科大学の教育理念として受け継がれています。



最盛期の星製薬株式会社

星一は、昭和二十五年、アメリカへ旅行中、ロサンゼルスで病氣になり、亡くなりました。常人では耐え難い苦難を味わいながらも、情熱を失うことなく、信じた道をまっすぐに進み、努力を重ねる星一の生き方は、私たちに大切なことを教えてくれます。

#### 【参考文献】

「明治・父・アメリカ」 星 新一 著（新潮文庫）

「人民は弱し 官吏は強し」 星 新一 著（新潮文庫）

「いわきの人物誌（上）」 いわき地域学會 発行